あぶらむ通信

第35号　2013年12月　あぶらむの会発行
〒509-4121　岐阜県高山市国府町宇津江3225-1
TEL 0577-72-4219　FAX 0577-72-4494
E-mail : abram@hidatakayama.ne.jp

街角で見つけた紙人形
絵：イク．O

飛騨便り

2013年も残りわずか、落葉を直前にして燃えるような木々をみながら、この一年の活動をお届けいたします。

—里の中の小さな自然—

「ハチが家近くに巣をかける時は台風が多い年」といういい伝えがある。今年は部屋の中にまで入ってきて巣をつくろうとしたハチ、こんなことははじめてのことだった。いい伝え通り台風の当たり年。被災地フィリピンの人達には申し訳ないが30号が日本を直撃していたらどのようなことになっていただろうか。想像するだけでゾっとする。それにしても数ヶ月先の出来事を察知するハチの予知能力とは一体何なのだろうか。あの小さな体のどこにそんな能力があるのか、あるのはハチ毒だけではないようだ。

ハチと私とは天敵関係、あの世の入口まで行ってもどってきたこと2回、刺される度にアレルギー反応も重くなってきている。

今年も刺されること4回と台風なみとなった。この辺のハチといえばアシナガかスズメバチ、いずれも黒と黄色のタイガース模様。しかし今夏はめったにお目にかかれないというチャイロスズメバチにやられた。それも二連発。

木工所のベランダの解体作業中、赤黒い色のハチが威嚇してきた。タイガース模様ならばこちらも警戒したのだが、見たこともないような色のヤツだったのでノーマーク。顔を刺され全身アレルギー症状で病院へ。翌日補導委託中の家裁少年もやられたので、頭にきた私は仕返しに。完全防備でのぞんだものの厚手の手袋の上から刺され返り討ち、これが今はやりの「倍返し」か。ハチにやられるのだからしまりがない。図鑑で調べたらこのチャイロスズメバチ、オオスズメバチに優るとも劣らない猛毒の持ち主。さすがの私も絶不調となり夏の繁忙期に10日間も寝込むこととなってしまった。

そんな私が「蜜バチ」をやるというから周囲は猛反対、「そんなにハチミツが好きなら送ってあげるからやめなさい」とYさん。でも私がほしいのはこのあぶらむの里の中からの自然の恵み、みようみまねで巣箱をつくり、里に15ヶ所設置した。1割入れば上出来というこの世界、なんと宿のすぐ近くに置いた箱に一群が入った。驚きと興奮、もう嬉しくてかわいくて、孫以上にかわいいのです。その動き、一日みていてもあきない。

ミツバチ達をみていて感動することはその働きぶりと生態である。両足に花粉粒をかかえ必死な様で巣に運び入れる彼ら、それを待ちうけている天敵のスズメバチ。それを集団でウェーブをおこし撃退するミツバチ達。そしてハエたたきを手にして加勢する私。

巣の中で羽化したミツバチは若いころは内勤で幼虫の世話や巣の掃除仕事をするという。ミツを集めたり、外敵と闘ったりする外勤仕事は全て年老いたハチの役割という。キケンな役割を担うのは年老いたものの役割とは何と素晴らしい社会だろうか、人間社会も見習うべきだと思う。どうしても戦争行為がやめられないならば、ミツバチに見習って兵士となるのは定年退職した者に限るという国際条約をつくり、それに従うこと。そうすれば国や家族のためという最後のご奉公もでき、何よりもゼーゼーハーハーと戦場をかけずりまわることもできず、さぞかし穏やかな戦事になるように思う。ミツバチたちの働きをみていると、ついついこんなことを夢想してしまう私でした。

そんな彼らからミツをいただく日、少し心が痛んだ。採蜜を教えてくれた日本ミツバチ協会の山田さん、「安全で住み心地よい巣を提供してやったのだから家賃をいただくと思えばいいですよ」の一言で気持ちが楽になり、ひと枡分だけいただくことにした。何と4リットルも採れた。そのお返しに同量分の砂糖水をくれてやったが後ろめたさはどこかに残る。これからの寒い日々を無事に越えれるようにとワラやムシロで保温してやっていたらその一匹に耳を刺された。刺した相手がミツバチだと思ったら怒る気にはならなかった。スズメバチほどではないがやはりそれなりに痛く、かゆかったが、おかげで「福耳」になったと喜んでいる自分がいた。

スズメバチにやられながらもスズメバチの焼酎漬づくり。
虫さされによく効く。

このように、ハチで明け、ハチで暮れた一年でした。あぶらむの里が位置する「里山」とよばれるところは、人の心を童心に帰らせ、やさしく穏やかにするところがあるように思います。家庭裁判所調査官の辻村さんより、「17人もの少年を預かり、一人も逃亡者が出ないということはなかなかないことです」といってもらったが、それは一つにこの里山という自然環境が持つ「人間教育力」のように私は思います。

このような場を用いての「里山生活学校」、作業棟建築などわずかずつではありますがスタートしました。ある程度の態勢が整ったところで皆様に、そして広く世間に案内させていただきたく思っています。

学生時代、私と一緒にハンセン病療養所沖縄愛楽園を訪ねボランティア活動を共にした高柳誠さんが、定年退職後ライフワークの一つとして、その愛楽園で出会った人々の絵を描き続けました。そしてその力作があぶらむの里諸魂庵にかかげられています。どの顔もどの顔も与えられた己が人生を必死になって生き抜いてきた顔、そしてそこに漂う限りない「おだやかさ」。私は作者のおもいと、出会ってきた愛楽園の人たちのその姿に励まされ(無論、あぶらむを支えてくださっている皆様の声援も)、最後の仕事としてこの里山生活学校を実現していきたく強く願っています。

高柳 誠さんの力作

年が明け2014年にはまたどこかで無理なお願い事をすることになるかもしれませんが、これからもどうぞ当会の働きに多大なご理解とご支援をお寄せ下さいますよう心よりお願い申し上げます。

また冬がめぐってきます。お元気でお過ごし下さいませ。どうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さい。

2013年12月

あぶらむの会 代表 大 郷 博

東日本大震災

安心して暮らせる日が訪れるまで、息の長い支援を

立教大学勤務　あぶらむの会 理事　西田　邦昭

「皆さんは、東北の人間は我慢強い、辛抱強いとおっしゃるけれども、そんなことはありません。昼間はみんな笑顔で皆さんに接しているけれども、夜一人になると泣いています。今は多くの方々に陸前高田に来ていただき、思いを寄せて励ましていただいているから頑張れるけれども、時間が経つにつれ報道が少なくなって忘れていかれると、私たちは頑張ることが出来なくなります。どうか、立教大学の皆さんには、これからも細くてもよいので息の長い支援をお願いします。」

これは、2011年3月11日に発生した東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県陸前高田市における学生による2011年度夏季陸前高田支援ボランティアが終了する日、お礼を申し上げるために戸羽太市長を訪問した際に同市長から頂戴した言葉です。

私が勤務している立教大学は、東日本大震災からの復旧・復興を支援するために、震災直後の4月に立教大学東日本大震災復興支援本部を立ち上げ、活動を開始しました。今回の震災による被災地が広範囲にわたることから、震災の前年度まで8年間にわたり学生を対象とした「林業体験プログラム」でお世話になってきた岩手県陸前高田市を重点支援地域に指定させていただき、今日まで多様な支援活動を展開してきました。

具体的には、学生による災害ボランティア、職員による災害ボランティア、仮設住宅での子ども支援ボランティアや住民との交流、仮設図書館の開設準備と移動図書館で利用するための図書の選書ボランティア、小中学生を対象とした体育会野球部による野球教室や体育会バレー部によるバレーボール教室の開催、教員による市職員の援助活動、立教大学に来ている留学生とこれから海外へ留学する本学学生によるスタディツアー、東京でも被災地の現状を発信するために立教大学の地元にある東京芸術劇場を会場にした「つながる。

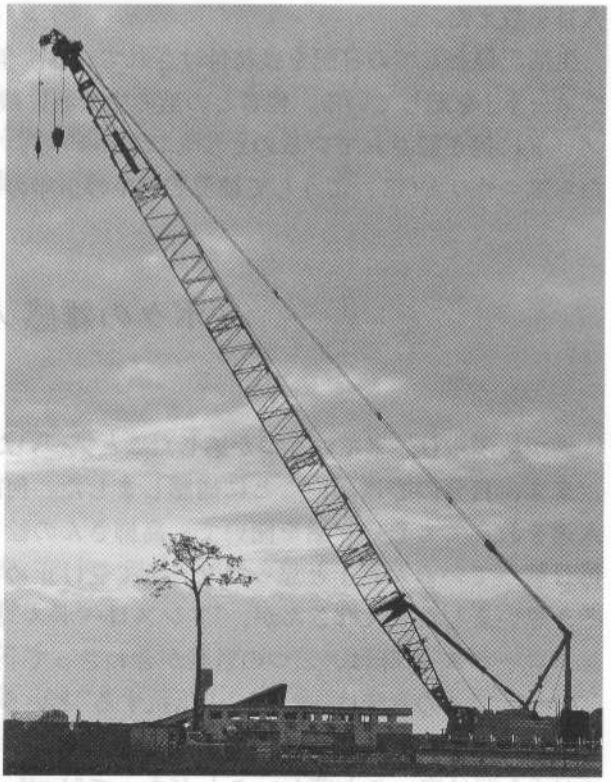
陸前高田と立教大学」交流展の開催などです。支援本部の活動とは別に、コミュニティ福祉学部では陸前高田、石巻、気仙沼で活動を展開しています。また社会学部や経営学部でも同様の活動を行っています。

そして、昨年5月には、これまでの陸前高田市と本学との連携・交流関係をさらに確かなものとするために「陸前高田市と立教大学との連携及び交流に関する協定」を締結しました。

陸前高田市は、震災前の人口が約24,000人、そのうち今回の震災での死亡または行方不明の方々が約1,800人と、今回の震災で最も被害の大きかった町のひとつと言われています。

今回の立教大学の活動は、震災により壊滅的な被害を受けた陸前高田市の復旧・復興に、少しでも力になれればという思いで始めたものであり、学生の学びや成長を目的としたものではありませんでした。しかしながら、瓦礫撤去の作業や仮設住宅での交流、スポーツによる小中学生との交流などを通して、家族や親族を失い、家を失い、仕事を失い、友や仲間を失い、地域コミュニティが崩壊し、これ以上ない悲しみや苦しみの中で、耐え忍びながら一歩前に歩み出そうとされている姿や、遠く東京から訪れる私たちに対して、「ありがとうございます」、「頑張ってくださいね」、「怪我しないように気をつけてくださいね」など温かい声をかけてくださり、笑顔で迎えてくださる姿に接し、学生たちは生きることの辛さと人間の強さや優しさを学んできました。これから大学で学び、社会の中で生きていく上での「根っこ」とでもよべる大変貴重な体験をさせていただいています。

また、若い学生たちはお年寄りや子どもたちにとってオールマイティの存在です。学生たちと交流すると元気がもらえると言っていただけます。大学にできることには限りがありますが、若い学生が被災地を訪問し現地の方々と交流することが、何よりの支援活動になっているようです。



陸前高田、奇跡の一本松近くに設置された巨大クレーン。山を崩し平地の地盤をかさ上げする作業のためとのこと。

震災から2年8ヶ月が経過しました。この間私は陸前高田市を30回ほど訪問させていただきました。時間の経過とともに、町の風景は大きく変化してきています。崩壊した建物やそこら中に散乱していたガレキも片付けられ、一面野原のような景観に変わっています。津波を免れた地域には、仮設の商店も営業を開始しました。町の復興計画に沿って、高台移転のための工事も始まっています。

一方で、ボランティアなどで市外から訪れる人は激減し、震災後に町を離れた住民も多く、人口は20,000人を割っているのではないかと言われています。被災地に係わる報道もほとんどなくなり、被災地以外では関心も薄れ、中には復興したと思っている人もいるようです。しかし、未だ多くの方々が、不自由な仮設住宅暮らしを余儀なくされ、産業復興も思うようには進まず生活再建の目処が立っていません。どのような形で復興するにしても、これから5年、10年、あるいはそれ以上の年月がかかるように思います。

今回の震災で日本中が学んだことは、人と人とがつながることで悲しみや苦しみに耐え、生きるための勇気を与えてくれるということでした。

立教大学としては、冒頭の戸羽市長の言葉に代表される住民の方々の思いに応えるためにも、被災地で悲しみや苦しみ耐え忍んでいる方々が安心して暮らせる日が訪れるまで、細々とでも支援活動を続けていきたいと思っています。

あぶらむでの家裁少年

家庭裁判所の補導委託制度に関わって10年目、委託された少年との半年間の生活も17人目を数えた。

生活記録としての日記を義務付けされている少年達、17人目の今回の少年はその他に「雑感ノート」を記している。他者(ひと)との話の中で心に残ったことを記しているという。その雑感ノートに何が記されているのか少しばかりのぞいてみたくなった。通信への原稿依頼をしたらアッサリとOK、こうして補導委託中の少年の手記をお届けすることとなった。

ボクの雑感ノート

少年N（18才）

僕があぶらむへ来ていくつか感じたこと気づいたことがあります

まず、自分の心は弱いことに痛感しました。何故かと言うと、大郷さんにハンセン病の人達を教えてもらい、話を聞いて、高柳さんの絵を見たりして、僕は、ハンセン病の人は毎日戦っているんだ！と思ったり、全て受け止めて、前向きに病気に立ち向かっている！そう思いました。大郷さんが、“アンスローポス”という言葉を僕に教えてくれました。“アンスローポス”意味は、二つの言葉が合わさって「人間」という言葉が出来ました。一つは、“アンチ”でこの意味は“逆らう”“抵抗する”という意味で、二つ目は“レポー”でこの意味は“沈む”や“倒れる”という二つの言葉から出来ているらしく、大郷さんが僕に伝えてくれたのは「人間は辛いこと悲しいことがあって“レポー”する、だけど人間っていうのは、それに対して“アンチ”出来る力があるんだ！ハンセン病の人達はまさに“アンスローポス”なん

だ！」と僕に何か伝えているような気がしました。僕も人間なので辛いこといっぱいありました。人間ですので当たり前です。でも僕はずっと後悔していたし、引きずったりもしていました。ですがこの話を聞き、僕は少し前向きになれたかな？と思う。人と比べるのは良くないけど、悩んでた事が、ハンセン病を背負って前向きに生きてる人からしたら小さな事だし、それで僕は心がとても弱いと思いました。だけど人はみんな受け止め方違うし考え方も違うので、僕の考えはとてもマイナスな考えだったんだ！と強く思い、これからは、大郷さんが教えてくれた"アンスローポス"のように力強く前向きに生きていこう！生活していこう！と心から思いました。

今この文章を書いて色々な話思い返すと、大郷さんは僕に何気なく大切な事を手渡してくれる。その中で一番感謝したいのは、僕に見せてくれた"自分との和解"というのがあって大郷さんが書いた文章を見て自分の部屋でボーっとしていたら今まで思い出すことがなかった4歳～5歳の頃を思い出しました。自分にとって一番辛くて嫌な思い出だと思う。家族もめちゃくちゃで母は毎日家に帰ってこなく、父は離婚して居てなくて、9歳上の兄と暮らしていたのですが、毎日兄に殴られ食事も食べれず、水も飲ましてもらえなかった。僕はその事に耐えれず、兄に見つからないよう家を出ました。僕は喉が渇いてたけど、しばらく我慢してぶらぶらしていましたがついに耐えれなく、マンホールの上に溜まった雨水を飲みました。この事を思い出しました。多分、生きるのに必死だったんだと思う。だから普通では出来ない事も出来たと思う。そしてこの出来事が心の奥にあったからあぶらむに来るまでの出来事を乗り越えれたんだと思った。この出来事を思い出させてくれた事思わせてくれた事に対して大郷さんにとても感謝しています。話変わりますが僕は初め来た7月19日の時から今の心境は少しずつですが変わっているかな？と思うし変わっていきたい！そう思う気持ちがあります。初めて来たときは、何でこんな山奥？都会の少年がこんな場所でいけんの？とか色々思いました。だけど16年ぶりに再会したお父さんとも辻村さん(家庭裁判所調査官)とも約束をしてあぶらむへ来たので、裏切るような事はしたくない、少しずつ自分なりに頑張ろうと思っていました。そしてあぶらむで生活が始まったのです。僕の考えてた不安な気持ちは消えました。理由は、大郷さんを尊敬したし憧れた。凄い所は、作業能力もそうですが特に、頭の良さ回転の速さ、考える事の豊富さが他の人とは違い僕にとって大きな力を与えてくれた。そして今まで大郷さんの背中みてきましたが今はいつか越えよう！という想いへ変わりつつあります。大郷さんと作業していて嬉しいことがあります。それは、僕に意見を求めてくれる。僕にとってとても嬉しいことの一つです。何故かというと、現社会では仕事は上の人の考えだけで事を進めていく。下の人はそれに従っている。たいがいはこれが常識だと思っているけど、僕は嫌い。僕が思うのは、"いくら経験を積んでも同じ事しか頭に浮かばないと思うし、下の人も考える事を人任せでいてるから自己判断力とか考える力が欠けてくる。初めて経験する人も意見言えたり出来る環境、関係になれば良い"と思う。言いたいのは、「プロ」と「アマ」、「大人」と「子ども」の考えが合わされば きっと新しい何かが見つかる、生まれると僕は信じている。僕は18年間生きてきて感じている、今も。人生でも自分の考えだけではなく、他の人の意見を取り入れる事で違う考えが交わり、違う事を見つけれましたし、色々な見方が変わった。だから僕は大郷さんが、その事も考えて僕に意見を聞いてるのかな？と思ったりして嬉しい。ま

あ僕の思い込みですけど…そして僕の嫌いなマニュアル化。そんなの必要ない。地震の時、台風の時、危ない時、マニュアル化だと何処に逃げるか、どうしたら良いのか、決まってるから自己判断しなくなるし、みんなあっち行ったから私も…とか、警報出していないから人が亡くなった、とかそんなんじゃこの世界みんな他人、マニュアル頼りになり自分が自分でなくなる。マニュアル化はいざ！という時は役に立つかもしれんけど、つい頼り過ぎたら、いつか後悔する。自分が逃げたい所逃げたらいいし、危ないと思ったら自分で逃げる所判断したらいい。そして子ども達を伸ばすのは、自己判断力が欠けていたら伸びない。子ども達の命は周りの大人の判断力に限るし子ども達に危ない事させないのじゃなく、何故危ないのか!?どうすれば良くて危なくないのか!?それを教えるのが教育だし今の社会の教育のマニュアルもおかしい。話変わりますが、僕はこれから子どもと一緒に成長し、分かち合い教え合いたい。大人からも学ぶ事は多い。だけど子どもは大人と違い傷が付きやすい心を持ち、怯え、心が叫んでる。僕はそんな子と学び合いたいと思う。僕は子どもを支えたい。子どもの心に寄り添いたい。絶対に力になれるってわけではないけど一緒に挫折して、支え合い、乗り越えていきたい。そしたらきっと何か見えるはず。子ども達の個性を生かし、一人一人と向き合い教えてあげたい、本当の生きる幸せというのを。こういう教育の仕方をしたい。そしてあぶらむのように皆を変えたい。あと補導委託に対して思った事がある。それは"少年が逃げる"その場所を作っているのは、周りの人達に課題があるのだと思う。少年は心に対してとても傷つきやすいしそして周りの人はそれを知ろうとしない。僕は、少しでも、その少年達に心優しい気持ちを向けてあげたり、何か少しのことでも感じてあげ心の叫びを聞いてあげたら逃げたりしないと思う。すぐには難しいし駆け引きがない。だけど少しでも分かろうとする気持ちがあるなら僕はいつか、お互いが素直に言い合える、分かり合えると思う。あぶらむは心優しい人に支えられ、出会い、教え合い、学び、共に暮らす、そして分かり合えるそんな良い環境です、少年にとって、暮らしやすい環境。この場所みんな大切にしてほしい。きっと多くの人達を変えれる力があぶらむにある。そして補導委託で感じれた事、少しの間家族と距離を置き、一から関係を作れたり少し離れたから、とても大切な存在だと気付くし、本当の家族のあたたかさが感じれる。そんな事や、今まで経験した事ない事にチャレンジ出来たり、身に付けれたり出会いの良さ、別れの辛さ、人との繋がり、大人を観てどのような人になりたいかとか、その為にはどうすれば良いのか!?とか自分の気持ちと向き合い今の自分はどういう人間でどういう考えを持っているのかどういう能力を持っているのか、などなど補導委託で考えれました。考えれる、気付ける、感じれる環境を作ってくれてありがとうございます。大郷さん、僕にとってあぶらむは、人生で素直に立ち止まれる環境で気付けて、感じれて、大切な事を本当の自分を取り戻せる場。"自然と生きる""自然と変わる""自然と成長する"あぶらむはこんな場。僕の事支えてくれてる方々ありがとうございます。これからも努力し前向きに生きます。そしていつも笑顔でいたい。

あぶらむ、この一年のプログラムに参加して

「あの家は親の代からのお付き合いだから失礼のないように」、商家だった私の家、「商人は一時の商売ではなく代を重ねるような商いを」と、配達の時など父からよく商人としての心構えを諭された。

子どもが参加するあぶらむのプログラム、その半分近くは大学時代の卒業生の子弟かその紹介者。狭いといわれればそれまでだが、親子二代に渡ってお付き合いできるなんて今の時代では貴重品。

「あぶらむ」は人が育つ場であることを願いつつ、この一年の参加者の声をお届けしたい。

あぶらむ落語会報告レポート

下田　寛子

この夏、日本中で最も熱い祭典 あぶらむ落語会に参加してきました！

……巷の女子高生がブログやFacebookで報告するように記しても誤魔化せません。私はこの度、本当に"参加"させていただきました。具体的には、実際に高座に上がって、落語を演じたということでございます。今年でもう六回目となりましたあぶらむ夏の落語会に、なぜ、一般人であるところの私が出演させていただいたのかと申しますと、それは昨年の夏に行われた第五回あぶらむ落語会での出会いまでさかのぼります。

その年のあぶらむ落語会に私は、母の誘いで観客として参加いたしました。今思うと、その時の歌之助さんの高座が輝いて見えたのは、気のせいでも、夜の電灯に寄ってくる蛾のりんぷんのせいでもなく、神のお告げだったのかもしれません。落語会が終わり、落語家さんもお客さんも一緒になってお酒を酌み交わす宴会の席に、落語家さんのお話をこっそり漏れ聞ければと、私も同席していました。いい具合に盛り上がってきた宴席で、危険な話題に突入します。お酒の入った大郷先生が一言。「学校で落語研究会に入った寛子ちゃん(私の名前)なら、歌之助さんの前座をやらせてはどうか」その場にどっと笑いが起こるかと思いきや、周りの皆さんや歌之助さんまでもがノリノリでOKしてくださるではありませんか。そのお声に、二度とない機会への好奇心と、プロの落語家さんの目の前で、部活動という一種の自己満足である私の落語を演じることへのためらいとが湧き出ます。迷いながら返事をためらっている間にあれよあれよと正式に出演へと話が進んでいったのでございます。

無責任な言い方ではありましたが、皆さん真剣に考えて素人の前座出演をOKしてくださり、私自身が心折れていてどうするんだと励まされたことは間違いありません。不安と恐れに日々押しつぶされそうになりながら準備をすすめ、2013あぶらむ落語会当日を迎えます。

当日の正午過ぎにあぶらむの宿に到着し荷物を部屋に置いてから、開演の19時までにはまだ時間があるので、宿の周りを散策しながら、今晩の落語会会場となる諸魂庵を覗くとそこには、素敵な木製の高座とその上に大きな座布団が。数時間後にはここで多くの方の

目の前で落語をやるのだという緊張感と同時に、昨年、落語会でやってみないかと声をかけていただいたときのような高揚感が湧き出てくるのを感じます。ワクワクどきどきな気持ちを糧に、時間の許す限り練習をしたいと思ったときに、足が自然と宿舎の裏の山の方へと向かいました。しっとりした木々の間をゆったりと時が流れる森の中で、自分の落語の声だけが響く空間は不思議と癒しを取り戻してくれるようで、心が穏やかになっていきます。森落語。おすすめです(笑)

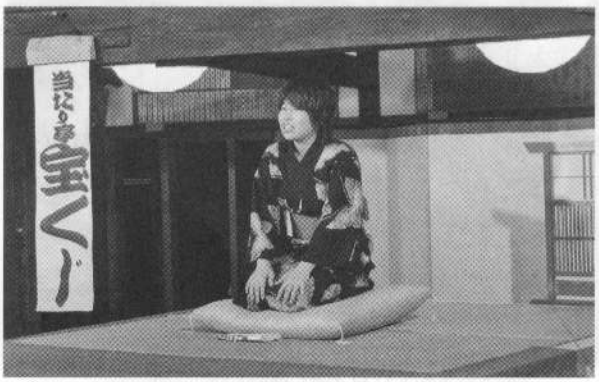
その後再び諸魂庵を訪れると、今晩の主役、三代目桂歌之助さんと前座の桂鯛蔵さん、出囃子の方の御三方が到着なさっていました。簡単な御挨拶を終え、こそこそと宿に戻ろうとしたとき、予期せぬ声がかかります。「せっかくだからお手伝いしてもらおうか」前座として、落語を演じる以外のお仕事と、極めつけは、今年の歌之助さんの落語での演出の一つ、照明の切り替えという任務を仰せつかることに。ほぐれた緊張が再び引き締まるように感じました。

いざ本番直前となると、私は高座裏でどこに控えていればいいかも分からず動転しまくりでしたが、楽屋では歌之助さんと鯛蔵さんがリラックスした御様子でお話しされていて、また、私が高座に上がる際の出囃子についてお囃子さんと相談したり、学校の話をしたり、緊張していた私をほぐしてくださいました。

そして、本番。一番気がかりだったのは、私の素人の落語で皆さんが笑ってくださるかということ。学校での落語がウケるのには、友人が落語をしているというだけで、いつもとのギャップに可笑しさを感じるという下駄が下支えしてくれています。しかし部活動としてよく見知った友人の前で発表するのとは、今回はわけが違います。ほぼ初対面の皆さんに対して、その下駄なしに楽しんでいただけるかどうか…。

心臓をバクバク鳴らしながら、実際に高座にあがると、わくわくしたような表情でこちらを見上げている皆さんが視界いっぱいに広がっています。こんなにも楽しそうに期待しながら見てくださる皆さんには、絶対ちゃんと応えたいと勇気付けられ、身体にエンジンがかかっていくのを感じました。

今回の落語会を通して経験した出来事や感情は、数ヶ月経った今でも思い返すことがあります。今年の秋、部活を引退した私の短い落語人生の中で、大きな区切りであり集大成であったこの落語会。大郷先生は、人見知りをして、なかなか積極的になれない私を、半ば強引にこの落語会に出演させてくださいました。他では体験できないことをいつも私たちに与えてくれます。せっかくだから、という一言で多くの貴重な体験をさせてくださった桂歌之助師匠と、大郷先生、笑ってあげようと身を乗り出しながら聞いてくださったあたたかいお客様の皆様、そしてピリピリしていた私にも優しく、私よりも本番まで緊張してくれていた家族にとても感謝して



諸魂庵での一席。寛ちゃん大熱演。

います。多くの方に支えられながら、私はまたひとつ、素敵な思い出と根性を授かりました。大変稚拙な落語と文章でしたが、ご清聴ありがとうございました。お後がよろしいようで。

当たり亭宝くじの母

下田　由香

今年も６回目を迎えた『桂歌之助　落語会』に伺いました。昨年娘と２人で伺い、夜の懇親会で「高１で落研に所属しています」とご挨拶していたら、大郷先生から「来年落語をやったらどうだ」と言われて、「まさかプロの落語家さんの前では恐れ多いですよ」と言っていましたら、歌之助さんが、「寛子さんならいいですよ」、と快諾してくださり瓢箪から駒のような話となりました。あとで伺ったところ、人柄をみたそうで、自信満々ではなく、私なんかでいいのでしょうか、といったところでお許しがでたようでした。

高校２年生の夏は最後の文化祭ということで、落研の雑誌の編集、後夜祭の司会練習、落研部屋の展示制作等忙しそうな中、夏合宿で練習した噺をやらせていただくのかと思っていたら、前座ではふさわしくないので、別の噺をやるということで、親としては大丈夫なのかと不安になりました。親が寝てから練習していたようで、当日まで一切見ることもできず、ついつい叱咤激励をして嫌な顔をされました。

当日、諸魂庵にいらっしゃる歌之助さん、鯛蔵さん、お囃子さんに、ご挨拶に伺うと、手伝ってもらおうと、めくりのみならず、照明のスイッチ係を仰せつかり、自分の出番だけでも大変だろうに、はじめてでやれるのかと、親の方がドキドキしました。会場には野山の草花が活けられて、手創りの高座に屏風も並び、お客様が着席され、森のクマさんのメロディの三味線と太鼓の出囃子のなか、寛子がゆかた姿で登場しました。緊張した面持ちでまくらを噺はじめると、前座としてのあたり亭宝くじの世界がひろがり、『真田小僧』を無事終え、皆さまにあたたかく笑っていただき、親として心からほっとしました。歌之助さんからは、後日とても丁寧な喋りっぷりで、母校の落研にもあれだけ達者な女の子は中々いなかったとお褒めの言葉をいただき感激しました。そして鯛蔵さんの『動物園』では、ライオンの歩き方に大笑いし、歌之助さんは、『寝床』を40分以上大熱演され中入り後、先代譲りの、落語とは思えない大仕掛けを成功させた『善光寺骨寄せ』を披露してくださり、プロの神髄を見せていただき堪能しました。最後に宝くじに、大郷先生からあぶらむの草花の花束をいただきました。大郷先生には親子二代でお世話になり、あかちゃんの頃から夏休みや春休みに伺い、ネパールキャンプに参加したり、故郷のようなあぶらむの諸魂庵で、貴重な機会を与えていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

歌之助さん、鯛蔵さんお二人は桂米団治独演会、横浜にぎわい座九月興行に出演されたり、三遊亭歌之介、桂歌之助二人会を、10月に渋谷区文化センター伝承ホールで開催されたりと、関西のみならず、東京方面でもご活躍で、その後追っかけのように伺って本場の落語にまた感動しました。あらためて、飛騨の山奥までよくぞ来ていただき、ご一緒させていただけたと感謝いたしました。歌之助さんは、毎年あぶらむの生活も楽しんでいただき、「桂歌之助上京掲示板」というブログに落語会、五右衛門風呂、ロープ木登り、ハンモック等が

写真入りで紹介されていました。夏の風物詩、岐阜県飛騨への落語ツアー今後とも末永くどうぞよろしくお願いいたします。きさくな落語家さんと懇親会でも楽しめる、贅沢な落語会に、これからもどうぞ一人でも多くの方においでいただければと願っております。

親は、奥ゆかしく、まじめ(？)なのに、子供は兄弟揃って、文化祭等でステージにあがり司会をしたり、お笑いや落語に勤しみ、トマトの衣装を着て走りまわったりしているのは、何故だろうと考えますと、もの心ついてから毎夏休み伺ったあぶらむでの笑いの数々が刷り込まれたのでは、と思い当りました。育さんの「海苔の芸」をはじめ、大郷博輔くん、耕輔くんの持ちネタに小さい頃からどれだけ、笑いころげてきたことか。また食後に、いつのまにか始まる演芸大会の爆笑の盛り上がり。これらの楽しい記憶が、人と笑いあうことの嬉しさ、笑わせることの喜びを心にきざんでいったのではと思います。一度あじわうと、やみつきになるあぶらむの宴会、形はいろいろですが、これからも永遠に不滅です。

また皆さんでおおいに楽しんでいきたいですね。よろしくお願いいたします。

はじめてのあぶらむ自然学校

鵜川　瑞

私は2013年夏、はじめてあぶらむ自然学校に行きました。

さいしょはドキドキわくわく、かいさんの日はまだみんなといっしょにいたいという気持ちでした。この五日間わたしはゆうきと友だちの仲というプレゼントをもらいました。

廃線になった神岡鉄道。自転車でひっぱるトロッコに変身。大きな子がこぎ、小さな子はお客さん。

さいしょの滝とびこみでは、ドキドキしながら滝つぼにとびこみました。とびこんだしゅんかん、水中メガネが上のほうに上がってしまいパニックじょうたいになりました。でも、先生に「ナイス、ナイス」と言われて、よかったとあんしんしました。

つぎに川あそびの話。みんなで川あそびをしていたとき、わたしがながされたらけいとくんがたすけてくれました。うれしかったです。この時に魚も見ました。

登山の時は、クマ。自転車こぎの時はカモシカも見ました。この時はたまたまだったのかもしれませんが、あぶらむ自然学校ではたくさんの動物を見たし、たくさんのことを学びました。

友だちもふえたし、こんなに楽しかったことはないと今でも思います。

みなさんもぜひさんかしてみてください。

あぶらむ自然学校に行って

鵜川　泉

私は今年初めてあぶらむ自然学校に行きました。

すべてが楽しくて楽しくてたまりませんでしたが、私が特に楽しかったのは、すごろく川というきれいな川で泳いだことです。ライフジャケットをつけて青い川に飛び込むのは、すごく自由なことでした。

まわりの毎年来ている人たちともすぐに仲良くなれました。

育さんのお料理は、遊びつかれた体に元気をくれました。もう少し大人になったら育さんにお料理を習いたいと思いました。

北海道の家よりあぶらむは、比べものにならないぐらいに暑くて湿気が多かったですが、あぶらむ自然学校に行って本当に良かったです。

ささえてくださったみなさん、ありがとうございました。

念願の子連れあぶらむ

鵜川　たま

毎年毎年「あぶらむ通信」を読むたびに、「来年こそ連れて行こう！」と思い続けていたあぶらむにようやく娘たちを連れて行くことができました。

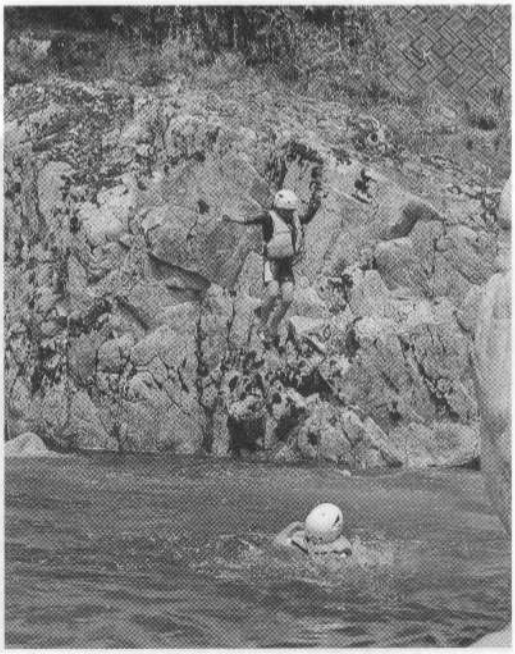
自然学校の日程が決まってすぐに飛行機のチケットを購入するという、決意がみなぎった行動で、どんなトラブルも恐れをなして遠慮してくれたのだと思います。

これだけ熱望している一方で、小さな不安もありました。　正直に書きます。

北海道でそれなりの自然の中で遊んでいるこどもたちが、失望したらどうしよう。ちょっぴりそう思っていました。

うちはアウトドア派の親ではありません。それだけに、市や団体が行なう子供向けのアウトドアプログラムには意識して参加しました。しかも玄関脇にキタキツネが座っているような所に住んでいます。こどもたちの戸外活動体験満足ラインは、都会のこどもたちとは違うだろうと考えていました。

しかし嬉しいことに、大郷先生の満足ラインは娘たちのはるか上だったようです。ライフジャケットやヘルメットなどの完全装備にも驚きました。こどもたちは安心して自然の中で自分の力を試すことができます。広瀬さん、な



清流 双六川での川遊び。
この川飛び込み、もうやめられません。

おやくん、という大変優秀なスタッフが脇を固めていて、ここに来られたこどもたちはなんて幸せなのだろうとしみじみ感じました。

あまりに遠距離なので私も期間中裏方スタッフとして置いていただきましたが、こちらがまた楽しくて楽しくて。育さん指揮の下、総勢30名以上の3食を用意するのですが、下ごしらえから食器洗いまで、どんどん手際が良くなり、次第に皆が前のめりになっていきます。ランナーズ・ハイならぬオサンドン・ハイ？　私もあぶらむ台所学校でたくさん勉強できました。今も家で手アイロンしています。あ、家では本物のアイロン使いなさい！ですね。

期間中、たくさんの方々から果物や野菜の差し入れがあったことも印象的でした。あぶらむ会員の皆さん、こどもたちが喜んでいただきますので美味しい夏の味覚を送ってやってください。よろしくお願いいたします。

大郷先生、育さん、スタッフの皆さん、本当にありがとうございました。

爺・孫ネパール道中記

佐々木　国夫

孫のはるか(10歳)と奏人(8歳)は、爺(70歳)の誘いに応えて、「子どもから大人までのネパールの旅」に参加した。孫は、我が家に前泊、当日夕方、電車で帰宅ラッシュの混雑に揉まれながら羽田空港に着いた。大郷先生はじめ同行参加者13名の方々に温かく迎えていただいた。

便は定刻に離陸。翌早朝、中継地のバンコックまで孫は爆睡していた。乗り継ぎ待ちの4時間近く、はるかは読書、奏人は窓越しに見える飛行機を飽かずに眺めていた。

カトマンズで現地スタッフのウペさんに迎えられ、太陽が照りつけ真夏を思わせる暑さの中、世界文化遺産でネパール最大のヒンズー教寺院を巡った。河原に幾つも祭壇があり、煙が立ち上っていた。火葬が行われているところだった。ホテルに入り一休み。孫に、両親に手紙を書くよう勧めた。小さいテーブルを仲良くシェアし、一所懸命手紙を書いた。

ネパールの旅、1泊2日のラフティング。
定年を過ぎた大人も童心に返る一時。

翌朝、孫に体験させたかったラフティングに出発。バスは、市街を抜けトリスリ川沿いをドライブ。舗装が壊れた悪路は、バスを上下左右に激しく揺さぶったが、孫は夢の中、よく眠れるものだと

感心した。ラフティングは、男性組と女性陣、大郷先生、孫と爺の混成組に分かれた。爺も孫もゴムボートでの川下りは初体験、ワクワクした。川の流れは緩やかに見えたが、ところどころ白波を立てた急流があり、流れに乗ったときのスリルに思わず歓声をあげ、孫と一緒に楽しんだ。ボート同士が接近し大人が水かけ合戦を無邪気に始めると、孫も大興奮、負けずにオールを川面に叩き付け水を飛ばしていた。緩流では、孫は川に潜りしばし水泳に興じた。夕食はキャンプ場でタンドリーチキンのご馳走が用意されていた。孫はチキンにかぶりついていた。こんなに美味しい夕食に出会えて、孫の食事の心配は払拭した。

翌日、チトワンに向った。水田は、田植えが真っ盛り、子どもの頃を思い出し、何とものどかな感じがした。先住民族タルー族が、泥を塗り固めた長屋に大家族で生活している村を見学した。家畜が庭先に飼われて独特の臭気がムンムンしていたが、孫は平気だった。チトワン公園では、まず象に乗ってジャングルサファリ。小鹿や孔雀が見えたが、ベンガルタイガーやヒョウには出会えなかった。近年、出会う確率は低いそうだ。午後は、ジープサファリ。普段は中々見られないというサイに至近距離で出くわした。沼地の草むらの中で悠然と何かを食べている様に見えた。孫もジープから降り、サイの分厚い鎧のような皮膚の模様がはっきり見える距離まで近づき興奮状態で眺めていた。チトワン2日目、カヌーサファリ。川を音もなくゆっくりと流れに乗り進んでいく。ブルーが鮮やかなカワセミが飛び交い、ワニが岸辺で昼寝、猿が水辺を散歩、水草が淡いクリーム色の花を咲かせていた。小一時間、自然の静寂が何とも気持ち良かった。

旅後半のハイライト、ヒマラヤトレッキングが待っていた。ツアー募集で、手軽な山歩きと思っていたが、爺には結構ハードな登山だった。ポカラのホテルに大きな荷物を預け、シャウリバザール(1210m)からガンドルン村(1940m)へのトレッキングがスタート。前半は、ハイキング感覚で、奏人は時々、T君と手をつないで嬉しそうに歩いていた。登山口のロッジで昼食休憩。食事中雷雨に見舞われた。孫は天候を気に掛ける風もなく、持参のキャンディーを皆と分け合って喜んでいた。少し明るくなってきた頃、雨支度を整え雨中の出発となった。ここからは、良く整備された石段が続いた。登山道は、山岳住民の生活道路なので家畜の牛やロバとも行き交った。孫は、荷物をシェルパに預け身軽になり先頭集団で歩いたようだ。スタートから5時間余、目的地のガンドルン到着。丁度雨が上がった。少々足が不安のOさんも頑張って登り切り、皆の拍手で迎えられた。孫は達成感で少し興奮気味。夕食後の団欒で大人が酒を酌み交わしているとき、いきなり爺の背後にきて肩たたきをしてくれた。それから一人ひとりに肩た

旅のハイライト、八千米級の山々を眼前に。
日本に帰ったら、また頑張ろうという気持ちにさせられる。

たきをサービスして回り、皆に喜んでもらった。更に、“はるかなと堂”を立ち上げ、“いつでも肩たたき券”なるものを配っていた。旅行中、一人ひとりから気にかけていただき、援けてもらい楽しい旅行になった感謝の気持ちを彼らなりに表現したのであろう。爺は嬉しくなった。

翌朝、7000m級のアンナプルナの日の出の雄姿を鑑賞した。太陽が出る前に、山頂に、ポッと橙色がともり、頂きから下に刻々と広がっていく情景が神秘的だ。自然の景色にはあまり関心を示してこなかった孫が見入っていた。Sさんが写生をしていて、はるかは、Sさんの隣に腰掛け、絵具の使い方を教わりながら熱心に写生を始めた。トリスリ川のキャンプの朝も一人で川の景色をデッサンしていた。小学校ではブラバンの練習に明け暮れる子だ。好きな芸術を伸ばしていって欲しい。庭で真っ青な空と真っ白な山をご馳走に朝食の後、石楠花ツアー。真っ赤な石楠花が、ネパール国花だそうだ。2～3mの高木に満開の花が真っ白なアンナプルナを見上げていた。ツアーから帰って、奏人が急に怠いといって部屋に戻ったことをT君に告げられた。駆けつけてみると、横になってスナックをポリポリ、元気はある。トリスリ川キャンプ場ではるかが鼻血でお世話になった看護師のKSさんが心配して看に来てくださった。熱は37℃、ルルを飲ませてくれた。昨日の雨中のトレッキングで風邪を引いたのかも知れない。夕方には少し良くなり、夕食を一緒にしたが普段の調子ではなく眠そうだった。早めに部屋に帰して休ませた。奏人は一晩で回復し下山は無事だった。ポカラのホテルに戻って、シャワーを済ますと、孫はT君の部屋にお邪魔しじゃれあっていた。T君は大人たちの中では優に親子以上の年の差があり、孫とは少し離れた兄弟位の差だ。奏人を良く面倒見てくれると思ったが、T君の息抜きにもなっているのかと勝手に合点した(T君失礼)。

ポカラに一泊し、国内線で最終地カトマンズに向う。空港での待ち時間、孫は、ガンドルンで配った“いつでも肩たたき券”の利用客に、肩たたきをサービスしていた。カトマンズのホテル着後、ウペさんがショッピング希望者を繁華街に案内してくれ、孫も付き合った。狭い路地は土地の人で賑わっていた。はるかが紙屋で包装紙選びに時間を費やした。土産を包装するためだ。部屋に戻り、一番に土産の包装を始めた。

さよならディナーはネパール郷土料理のレストランだった。席に着いて驚いた。何と、07年に友人たちと来た時の最終日のディナーと同じレストランでしかも同じ席だった。最後に孫が皆さんからTシャツのプレゼントをいただいた。いろいろご迷惑をおかけしたのに皆さんに可愛がっていただき、感謝！

ウペさんが、孫が参加したことをとても喜んでくれた。日本の子どもたちは、外国のことを知らない。ネパールにきて大きな体験をした。二人は大きく成長するだろう。自分も案内できて感謝していると。爺は夢を膨らませた。傘寿に双子の孫とヒマラヤトレッキングをすることを。

2013年　あぶらむこの一年

1月・前日からの雪もやみ、雪花が美しい穏やかな元旦
　・12日～14日　沖縄からの雪祭り訪問団（12名）雪少なし
　・23日　瀬戸少年院視察訪問
　・ミツバチ箱づくり開始
2月・15日　渋谷聖ミカエル教会で講演
　・降雪量、例年の半分以下と思いきやだらだらと降り続き、終わってみれば平年並み。雪の重みでドアしまらず。カモシカに1mまで接近し写真撮影。
3月・2日　記念すべき第1回総会、出席者49名
　・7日　氷が溶け、雪がくさり出す
　・13日　今年も春の訪れを迎えることができた喜び「春一番の会」
　・25日～4月5日　第13回子どもから大人までのネパールの旅
4月・5日　韓国ウルトラマラソン協会の招待で済州島200kmマラソン視察訪問
　・13日　なめこ植菌
　・19日　第20回さくら道国際ネーチャーラン（名古屋―金沢250kmを36時間内で走る国際大会）
　・27日　オオルリの大群3日間とどまる
　・29日　ジャガイモ植え
5月・田畑おこし
　・17日　ミツバチ巣箱に入る
　・24日～25日　田植え
　・25日　津軽三味線二代目高橋竹山「第7回野休みコンサート」
　・26日　恒例　春のサイクリング（富山まで）
　・27日　飛騨地方梅雨入り
6月・6日　奥能登ウォーキング下見
　・29日　楡原伸君　唐松岳慰霊登山
7月・8日　飛騨地方梅雨明け
　・12日　沖縄へ　愛楽園訪問
　・19日　17人目家裁少年受け入れ
　・27日　地元町内会子どもキャンプ
8月・立教大学PRCキャンプ
　・5日～10日　あぶらむ夏季自然学校（スタッフ含め30人余）
　・12日　四国四万十で41℃　ハチに刺される。
　・21日　芦屋聖マルコ教会学校キャンプ
　・24日　第6回三代目桂歌之助落語会（当たり亭宝くじ　初舞台）
9月・10日～14日　奥能登ウォーキング101km
　・20日　稲刈り
　・23日　日本ミツバチの採蜜

10月・２日　脱穀（もみ袋53袋と豊作でした）
・５日　あぶらむの里内でマツタケ初採り
・９日　JA 看護専門学校宿泊研修会
・12日　WAYNO 第６回アンデスの風コンサート
・13日　天生湿原ウォーキング
・16日　高山日赤病院新入看護師宿泊研修
・26日　イノシシ防止柵設置
・31日　ナルさん退職（12年間ご苦労様でした）
11月・２日　沖縄より紅葉訪問団
・13日　初雪
・14日　家裁少年あぶらむにて中間審判
・越冬準備開始
12月・あぶらむ通信発行
・22日　クリスマス会

2014年　こんなこと（行事予定）

1月・11日～13日　あぶらむ雪祭り
3月・８日　あぶらむの会第２回総会
・10日～20日　ペルーインカ遺跡の旅（予定）
・29日　春一番の会
5月・17日　佐藤初女さん講演会
8月・４日～９日　あぶらむ里山自然学校
・23日　第７回桂歌之助落語会
9月・10日～15日　野麦峠越えウォーキング
・27日　稲刈り（予定）
10月・11日　第７回 WAYNO（アンデスの風コンサート）
・12日　位山ウォーキング
11月・特別企画　アルピニスト青田浩さんと歩くヒマラヤトレッキング（予定）

どうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さい。

『第1期通常総会　開催報告』

2012年1月に一般社団法人となり、初めての総会を開催いたしました。多くの方に参加いただき、心よりお礼申し上げます。

日　　時：2013年3月2日(土) 15：00～16：45（終了後、別会場で懇親会を開催）
場　　所：目白聖公会(東京都新宿区下落合3-19-4)
出 席 者：49名
総会次第：

(1) 開会挨拶・役員紹介
(2) 議長・議事録署名人・書記の指名
(3) 定数の確認
(4) 議案
・第1期活動報告
・第1期決算報告及び監査報告
＜貸借対照表＞
資産合計63,560,105円（流動資産22,226,128円　固定資産41,333,977円）
負債合計　167,668円（短期借入金167,668円）
正味財産63,392,437円
＜収支内訳＞
収入合計24,490,266円（会費収入1,935,100円　寄付収入13,460,044円
研修収入7,294,315円　他）
支出合計13,632,732円
当期収支10,857,534円
・第2期活動計画
・第2期予算(案)
＜収支予算案＞
収入合計15,320,000円（会費収入2,040,000円　寄付収入5,000,000円
研修収入7,800,000円　他）
支出合計15,520,000円（減価償却費を除いた実質支出14,900,000円）
ものづくり作業棟建設費用12,000,000円
(5)『あぶらむ里山生活学校』について

当日の資料、議事録は、あぶらむの会ホームページに掲載しています。
http://www.abram-no-kai.com/
画面右メニュー　"会員専用ページ"（パスワード：UTE48）にログインして、
画面右メニュー　"総会"をクリックしてください。

『第2期通常総会について』

1月下旬～2月上旬、2014年度会費納入いただいた会員各位に対して、第2期通常総会の正式案内状を郵送させていただきます。

日時：2014年3月8日(土) 14：30～ (14：00～受付開始)
場所：立教大学チャペル会館第一会議室(東京都豊島区西池袋3-34-1)
議案：第1号議案　第2期活動報告、決算報告、監査報告
　　第2号議案　第3期活動計画、予算案

総会終了後、大郷代表理事の講演会、懇親会を開催します。
会員未登録の方の参加も歓迎します。詳細内容、参加申込み方法については、1月下旬以降、あぶらむの会ホームページ、メルマガ等にて案内させていただきます。
2014年3月8日(土)
16：00～　講演会[立教大学8号館8304教室]
18：00～　懇親会[セントポールズ会館]

寄付者一覧（'12年12月14日～'13年12月11日）敬称略

相川喜久枝／愛知聖ルカ教会／安藝淳二／浅野高志・純子／味岡努・敏江／芦屋聖マルコ教会／東祐子／安藤隆年／飯島綾子／石原つや子／市川聖マリヤ教会／一柳典利・百／伊藤浩子／伊藤幸史／五百蔵久子／岩崎静子／岩沢満／学校法人聖ヨセフ学園岩田幼稚園／鵜川雅行／大郷穣・順子／大下大圓／大場弘子／大橋雅子／大八木米子／岡登信義／荻野登／梶原恵理子／片山吉章／加藤寛／加藤正／神原一二美／河合由美子／菊池卓大・啓子／岸村信治／北林淳子／吉川仁・恵子／木ノ内三代治／鬼本照男／金城盛弘・由美子／久世治靖／久保田豊／黒崎光太郎／河野正司・マリ子／後藤文雄／小林賢三・佳子／小柳證／財満研三郎・由美子／坂本吉弘／佐々木慶太郎／佐久本嗣功／澤野弥生／静谷英夫／篠田泰之／柴原薫／島文子／島袋洋子／下田英一・由香／神愛修女会愛の園／新開春樹・桂／鈴木武次・保子／須田肇／ストップス静江／須間栄津子／住宏平／瀬畑雄二／高瀬留美／高橋竹山／髙畑謡子／高柳真／田中洋子／田中國臣／谷市三・孝子／谷章子／谷口茂雄／俵里英子／千葉復活教会／中部学院大学宗教委員会／チューリップの会「とやま非行と向きあう親たちの会」／佃寿子／辻千恵子／寺田紀佐子／寺田信一／寺西伸平／富山聖マリア教会／中島務／長縄年延／中村力／日本聖公会ナザレ修女会／二井正秀／新家恵子／

新美喜代子／西川健二／根本四郎・陽子／長谷川秀司／畑井正春・郁子／浜中好美／原川恭一／比屋根るり子／福岡女学院中学高等学校／福田桂・亜矢子・一太／星野一朗／星野八千代／本間太樹／前田晃伸・容子／正井佐知子／松居勲／松岡龍哉／三沢悠子／水野淑子／溝際庸介／光安啓明／水戸部賀津子／宮城正男・正子／宮古聖ヤコブ教会／宮坂博和・聡子／宮崎なを／宗像千代子／森田喜之／八木克道／矢崎ふき子／矢部直美／山田哲／湯田啓一／横浜聖クリストファー教会／レーマン幸子／東京セントポールズライオンズクラブ

物品寄付者一覧（'12年12月14日～'13年12月）敬称略

柴原薫／田尾兵二

ガヴィス基金（'12年12月14日～'13年12月）敬称略

上田敏明／竹村真紀

2013年会費納入者一覧（'12年12月14日～'13年12月11日）敬称略

相澤牧人・緑／赤井充也／赤松道子／朝比奈誼／朝比奈時子／味岡努・敏江／穴井悦子／雨宮大朔・寿子／荒井優仁・彩月／新垣タケ子／飯田孝太郎／飯田尚明・麻子／石崎東人／石崎奈生美／石原つや子／一柳典利・百／井出米藏／伊藤浩子／伊東日出子／伊藤文雄・宣子／糸数宝善・敦子／猪野愈・三智子／岩沢満・喜美／岩坪哲哉／岩坪瑞枝／岩間光雄／上田敏明／上村誠・洋子／内田孝・由美／梅沢雪子／江洲良秀・文子／大城恵子／大杉匡弘／太田勝博／大橋雅子／大房健樹・和子／大嶺佐智子／大八木米子／岡登信義／岡野峻／小川卓・香代子／尾崎和廣／小野裕・伸子／小野田誠次・恵子／加倉井誠／笠井正志・美佳／笠原雅子／梶原恵理子／片岡義博／片桐多恵子／嘉手苅米子／加藤正・真知子／門谷成美／唐木田麻起子／河合由美子／川上詩朗・美砂／川上玲子／川口弘二・暁子／河田健二／川満一彦・すわ子／岸井孝司・ミツ子／木島出・八重子／岸元忠義・静江／鬼本照男・麗子／久世治靖・知子／倉辻明男／倉持直人・章子／栗山盛雄・洋子／黒田則子／小池直子／小泉恵子／河野裕道・礼子／後藤文雄／小林賢三・佳子／小松純一／小柳證／斎田美代子／斉藤美登里／斉藤寛明／酒井厚子／櫻井智則／笹岡淳也・由紀子／佐々木国夫・紀久江／佐藤耕一／佐藤純・芳恵／佐藤哲典／佐藤敏子／佐藤裕／佐藤芳子／沢田京子／澤野弥生／塩田純子／篠田泰之／篠宮慶次／柴原薫／渋澤一郎・博子／渋谷真理／島文子／島袋洋子／清水幸平／志村弘子／下田英一・由香／下畑幹／城下彰／杉村進／鈴木信子／鈴木眞喜子／鈴木康邦・知子／鈴木康仁・佳子／聖母訪問会／仙敷正俊／高瀬留美／高橋保／高濱友理江／滝谷紘一・美佐保／田口清吾・はるみ／竹内元章／竹中浩／武原正明／竹村真紀／伊達民和／田中篤／田中孝子／棚橋忍／棚橋美江／谷市三・孝子／谷昌二・利子／田部博文・あさ子／俵里英子／丹安紀子／筑井宏子／佃寿子／寺谷恵美子／桃原松五郎／時高照子／外村民彦／泊哲次／富永隆史・敦子／富安眞理／友野博樹・和子／豊永泰子／直井雅子／永井深雪／長坂尚・明美／中沢隆・由美子／中台哲夫・信子／長縄年延／長野純吉・紀子／中村洋・久美子／長谷幸雄／

中山美世子／新倉俊吾・久乃／西垣正子／西川照子／西口晃／西口喜久枝／西田邦昭／西田賀端実／西村斐佐代／西村正和・未帆／野崎久子／野添紀子／野田修治・洋子／野田修助・和子／萩谷長生・睦子／土師晴子／羽柴加寿代／長谷川秀司／畑井正春・郁子／畑中幸次郎／畑野榮一・寿子／比嘉良侑・政子／日根野慶一・侑子／日野忠市・静子／福田桂／福田亜矢子／福田一太／藤井誠／藤本隆／古市進・典子／古川秀昭・昭子／古澤昭夫・タイ／星野一朗・菜穂／星野直子／前田眞智子／前田晃・広世／前田晃伸／前田容子／又吉亀次／松井尚子／松居勲／松岡龍哉／松田捷朗／丸山千早／溝際庸介・康子／三原ヱイ／宮城正男・正子／宮坂博和・聡子／宮崎秀貴・てる美／宮崎なを／宮嶋眞・公恵／宮田洋子／宮脇加代子／三好洋子／武藤六治・満里子／宗像千代子／室岡鉄夫・恵／百井幸子／森田喜之／八木克道／保井孝・亮／山内寿美子／山口泰生／山崎美貴子／山田益男・育子／山本眞／吉田太・里香／吉野康／吉野美智子／若園紘志・由紀子／若松英輔／渡辺信子

新規会員（'12年12月14日～'13年12月）敬称略

河田健二／後藤文雄／滝谷紘一・美佐保／伊達民和／豊永泰子／友野博樹・和子／藤井誠／松岡龍哉／三好洋子／若園紘志

あぶらむ里山自然学校

2014年8月4日(月)～9日(土)

佐藤初女先生に感謝と愛を贈る会

出　演　佐藤　初女　若杉　友子　本道　佳子

特別参加　二代目　高橋　竹山　その他

日　時　2014年5月17日（土）

呼びかけ人代表　柴原　薫